

第4章 地域別の振興

1 地域共通の振興

農産については、市内各地域とも各種事業により基盤整備はほぼ完了しており、今後は収量性・収益性の高い麦・大豆の作付けを推進します。また、転作として広く普及している飼料用米やW C S用稲などの新規需要米、飼料作物の作付け拡大に併せ、稲わらの飼料への利活用、圃場への堆肥還元等の耕畜連携を図ります。

園芸については、さが園芸生産 888 億円推進運動の展開に則し、長寿命化対策による施設維持、先進的技術、省力化・高品質化機械の導入による収量・品質の向上を図り、産地の維持拡大を図っていきます。

畜産については畜産農家の高齢化が進んでいるが、周辺環境との問題を考えると既存施設以外の場所での新規就農は難しい状況にあります。このため、高齢で後継者がいない層の経営資源の担い手への計画的承継について各種団体や関係機関と協力していきます。また既存の畜産農家に対し畜産クラスターなどの国庫事業や県単事業を活用し、維持拡大に必要な施設整備、不足する労働力や技術力を補うための省力化設備・機械の導入を行うことにより維持拡大を図ります。

2 各地域の特徴と振興

(1) 納所地区

基幹作物は、米・麦・大豆・果樹（みかん・ビワ）・施設園芸（アスパラガス・いちご）などとなっています。水田では大豆のブロックローテーション方式を取り入れた団地化が実施され、転作の多くを担っています。果樹ではビワの産地であったが、生産量が減少してきています。施設園芸では主に、アスパラガス・いちごを取り入れ、米・麦・大豆を基幹とした複合経営が普及しています。今後は、これまでの振興を踏襲しつつ、特に盛んな施設園芸については、各種事業を活用し産地の維持拡大を図っていきます。

(2) 東多久地区

基幹作物は米・麦・みかんなどとなっており、一部では施設園芸（花き）や畜産との複合経営がなされています。

水田では主食用米からの転作作物として、飼料用米やW C S用稲を中心とした新規需要米が定着しています。今後もこれまでの振興を踏襲しながら産地の維持拡大を図っていきます。

(3) 南多久地区

基幹作物は米・麦・大豆・果樹（みかん・桃・なし・ウメ）などで、一部では施設園芸（なす・花き）との複合経営がなされており、畜産業も盛んです。

平坦部の水田では大豆やW C S用稲でのブロックローテーション方式を取り入れた団地化が実施され、中山間部では飼料用米を中心とした転作が定着しています。果樹では温州みかん園転換により、中晩柑や落葉果樹の果樹内複合経営が行われています。野菜については、伝統野菜の青しまうりの栽培が盛んで、多久市特産「青しまうり漬」としても販売されています。今後もこれまでの振興を踏襲しながら産地の維持拡大を図っていきます。

(4) 多久地区

基幹作物は米・麦・大豆・みかんなどとなっており、一部では施設園芸（いちご）や伝統野菜として「桐岡なす」も栽培されています。

水田では大豆のブロックローテーション方式を取り入れた団地化が実施され、これまで転作作物として多くを担ってきたが、飼料用米やW C S用稲といった新規需要米が転作作物として定着しつつあります。今後もこれまでの振興を踏襲しながら産地の維持拡大を図っていきます。

(5) 西多久地区

基幹作物は米・みかんとなっており、一部ではそばの栽培、高冷地を活かした露地野菜や伝統野菜として「女山大根」が栽培されています。

水田では中山間部や棚田が多く、主食用米からの転作作物として、飼料用米やW C S用稲といった新規需要米が定着しつつあります。また、平野地区では棚田で生産された米を「棚田米」として付加価値販売されています。果樹では温州みかんの栽培が古く、本市のみかんの主産地の一つとなっており、一部では根域制限栽培もされ、収量・収益の増が見込まれることから、さらなる普及が期待されます。今後は、これまでの振興を踏襲しつつ、地域の核でもある農産物直売所「幡船の里」を中心に、中山間地の多い地域特性を生かした産地の維持拡大を図っていきます。

(6) 北多久地区

基幹作物は米・麦・みかんで、一部では、畜産も営まれています。

水田では高収益作物の導入や転作作物等の付加価値向上による収益力強化に取り組み、果樹ではみかんの根域制限栽培を導入しているところもあり、収量・収益の増が見込まれることから、さらなる普及が期待されます。今後もこれまでの振興を踏襲しながら産地の維持拡大を図っていきます。畜産については、周辺環境を考えると他地区より規模拡大が望めると考えられます。このため規模拡大するために必要な施設投資（畜舎、糞尿処理施設、省力化施設等）への補助事業を推進します。